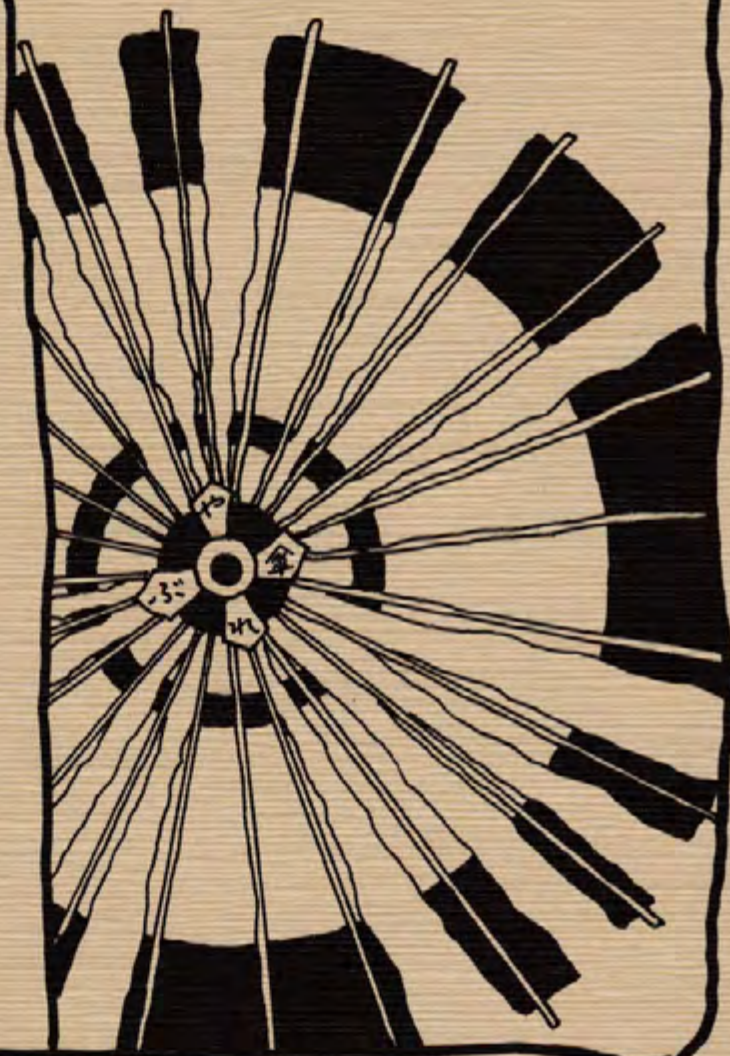


# やぶれ傘



九十九号

二〇一七年十二月

すこしだけわきへよりたる冬の蠅 根橋宏次

冬晴れの二階二階モノ干して きくちきみえ

脳みそがほつこりとする暖房車 丑久保 勲

暮れ易し雨が降つたり上がつたり 大島英昭

茶室へと飛び石続く花八手 廣瀬雅男

フルバンドジャズとワインと冬灯 青谷小枝

冬没日すりガラス窓ただ白く 藤井美晴

冬灯自分の足の影動く 小山陽子

今は亡き叔父に献杯にこり酒 瀬島酒望

水仙のひとかたまりが土手下に 白石正躬

境内の木々ながめみる神の留守 渡邊孝彦

東京を淡く沈めて秋入日 安藤久美子

おはじきに夕日のあたる冬座敷 天野美登里

おもむろに鈴の緒をひく神の留守 菊池洋子

ゆつたりと鯉のよりくる水の秋 秋山信行

抄 集 句 傘 れ ぶ や

大 崎 紀 夫 選

野紺菊咲きとほけた顔の土人形 有賀昌子

野分寄す国難問ふてふ総選挙 松村光典

県境をこえてひろがる罌雲 泉 一九

栗こはん零余子をちよつとだけ足して 奥田温子

筆塚の日の差すところ石蕨の花 上林富子

藤は実に自在に姿かへる雲 齋藤朋子

温かきコーヒーにする秋初め 時田義勝

沿道は麴の香りべつたら市 野口希代志

秋祭の司会してゐる同級生 萩原久代

一面の落葉をわける鯉の口 橋本美代

秋祭り声裏返る出店の娘 広瀬 濟

団栗をさくさく踏みて古墳まで 本田 武

敬老の日は老人になりきつて 武藤節子

道端に蝦夷鹿親子バス停まる 森美佐子

草紅葉空き地の隅に選挙カー 湯本 実

冬座敷

天野美登里

秋暑し河原を亀ののしのしと  
雨風の残る山道独活は実に  
行き止まる墓域に風の姫椿  
枕元に吸呑み寄せる寒さかな  
蕎麦刈りの朝の天気を読みにけり  
山あひの茶屋の三和土に枯蠨螂  
おはじきに夕日のあたる冬座敷  
庫裡に灯のともり始めるお茶の花  
糸魚の金線にふれ身をおろす  
石垣に日の差し冬の堇にも

神の留守

菊池洋子

見送りの子はふりむかず星月夜  
墓しまふ話ききをり小六月  
柿ひとつ置かれてゐたる石地蔵  
枯蓮の折れたるままに活けられて  
どんぐりの滑り台よりころげ落つ  
どんぐりの袴はかせて並べをり  
方丈の小さき札所野紺菊  
福耳の羅漢に近く冬の蜂  
おもむろに鈴の緒をひく神の留守  
をさなごの揃はぬいうぎ小鳥来る

水の秋

秋山信行

新涼の浜に無人の見張台  
たれかれの事あれこれと温め酒  
秋耕を下校の子等に励まされ  
小さき門くぐりて秋の浄瑠璃寺  
曲芸のぴたりときまる秋の空  
たまさかに大物が子に甘藷掘り  
ゆつたりと鯉のよりくる水の秋  
渡し場にすんと秋の日の暮れて  
豆腐屋の戸口はせまし秋簾  
子が走る银杏黄葉のただなかを

野紺菊

有賀昌子

炒飯をちりちり焦がし台風圏  
秋深し書架より抜きし『罪と罰』  
秋の昼砦のやうな発電所  
走り蕎麦家並みはうだち梶競ふごと  
色褪せし絵馬に吹く風そぞろ寒  
竿先のとどかぬ大き柿ひとつ  
野紺菊咲きとぼけた顔の土人形  
野菊咲く休耕田の片隅に  
蕪菜をたぶさ掴みに提げてくる  
延暦寺の二つの塔に秋時雨

日向ぼこ

松村光典

野分寄す国難問ふてふ総選挙  
さくさくと枯れ葉踏みゆくさくさくと  
小さき靴日向ぼこする保育園  
吹き溜まる枯葉の山の匂ひよし  
窓開けてキンモクセイの香をきく日  
木星にキンモクセイは咲くだろか  
秋雨にけぶる初島伊豆は晴れ  
秋雨にうたるもよし露天の湯  
皮硬き我が家のぶだう甘きこと  
降るは降るは秋の終りを吹くわ吹くわ

十五夜の境内に聞く馬頭琴  
秋の日をシヤガール展で過しけり  
秋風に揺れるカーテン猫じやれる  
通勤の秋の夕暮れ急ぎ足  
秋雨に皇居の緑より深く  
紅葉狩り疲れを癒すハーブティ  
霊場池紅葉落葉を敷き詰めて

枝みや子

新涼や針穴通る白き糸  
顔知らぬ遙か先祖の墓洗ふ  
隣家との狭き間あわいに虫の声  
団栗を竹ぼうきにて掃き散らし  
こきざみに脚立移して柚子をもぐ  
芸無しの猫の手をとる夜寒かな  
渋柿のまま売られぬる地下通路

大野芳久



岡田香緒里

建て付けの悪き引き戸に冬の風  
真夜中の猫の鳴き声月冴えて  
老犬の背中は丸し雪催  
自転車の籠に銀杏の落ち葉かな  
立ち話終へて歩道の落ち葉掃く  
侘助やひとつ咲きまたひとつ咲く  
留袖の紋はカタバミ神無月

奥田温子

栗ごはん零余子をちよつとだけ足して  
夜の雲の流れる隙に望の月  
遥拝所とふ山の頂蔦紅葉  
弘前行きの深夜バス来る十三夜  
芸人の声良くとほる秋祭り  
秋雨の庭に鳥来る晴るらし  
お雛子を背にして帰る秋祭り

神山市実

秋の蚊の次から次と犬に寄り  
押入れの夜具を引き出す肌寒さ  
玄関の花瓶の小菊葉の揺れて  
公園の遊具新し秋さやか  
墓参りどこからか猫集まりて  
クレーン車見上げる先の鱗雲  
外は雨犬と私の秋一日

亀岡睦子

幼子と折り紙遊び秋の昼  
衣被小粒の皮はつると剥け  
縄文土器いま眺めぬる秋日和  
細枝に実石榴三つぶら下がり  
高齢者ゆつつくり走る運動会  
そぞろ寒襟立てて行くマーケット  
山茶花をもう一度見る帰り路

上林富子

足冷えて青竹踏みを二百回  
里の小川石間に渡す芋水車  
秋晴や真正面に浅間山  
うそ寒や指輪食ひ込む薬指  
稲刈つて話のはずむ昔話  
ドライブの車を止めて紅葉山  
筆塚の日の差すところ石露の花

木村瑞枝

ロシアへと来て見事なるナナカマド  
旅装解き常の長き夜また楽し  
火酒ぐいとまたぐいと飲む夜長かな  
天高し女帝の城はそのままに  
蟪蝼の死に近き身を横たへて

黒木東吾

この道の遙かな先に秋の空  
秋帽子飾る遺品のペンダント  
秋の雨場違ひなほど降りにけり  
秋出水客の疎らな園芸店  
秋深し右に左に雲流れ  
猥雑な芸人の芸夜長し  
想ひ出はみんな細切れ秋深し

黒澤次郎

咲きみちて散るばかりなり百日紅  
芋の葉の裏返る朝鳩の声  
プラタナス早や秋色をおびにけり  
菊芋の花咲いてゐる休耕地  
榊の木の瘤をあらはに神無月  
冬めくや庭師のもつこ新しく  
かいつぶり川の中州の際で鳴く

小池一司

多摩川に人はまばらな秋の昼  
軒先に芒一叢植ゑてあり  
葬儀へと向かふ早足秋時雨  
ピラカンサの重く赤き実冬に入る  
笠雲をかぶる富士山柿真つ赤  
べつたらをつい味見してひとつ買ふ  
焼き鳥のもつの焦げ目に夕日差す

小巻若菜

中山道は遙か木曾へと曼珠沙華  
彼岸花棚田を下に畦道に  
寺の猫ゆつくり歩く椿の実  
てつぺんで珈琲旨し秋の山  
名月を雲は見せたり隠したり  
蟬坂を下りて散策終へる秋  
ぼんぼん時計のんびりと鳴る秋湿り